



お江戸舟遊び瓦版 1069号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

星野克美 「人新世の絶滅学(4)」

～人類・文明絶滅の思弁的空無実在論～ 鳥影社 22・11・30

第5部 懺悔

文明の大加速とCO₂の大量排出によって自然態の地球気候を破壊し、人新世という地球地質構造改悪の罪業を犯した人類に対して、テレストリアル(地球・大地)が「人類・文明の絶滅」という審判を下した。

第10章 人類悪性と文明衝動

- 地球自然の中に放置されれば直ちに生存危機に陥るほどに、「人類種とは、本質的に脆弱性の生き物である」、それ故に「第2の自然ともいふべき、人工物の文明の器」を造出することで、辛うじて生存持続をしてきた。そのために叡智を活用し悪用してきた。
- A・ゲーレンは「胎児性と幼児性を残す生存力が脆弱な欠陥生物である」と言い、その補完に「人工物の文明を生み出すしかなかった」、「頭脳の力を活用して文明を創り出した」と。
- 前世紀も後半になり、ポストモダン哲学が台頭する時代になると、人類悪性の哲学観は急展開した。「知恵・精神・理性・工作・経済の人」という「人間中心主義の人間観」を確立することによって、啓蒙主義は人間の自然支配を正当化し、工業文明の自己破滅的な膨張を鼓舞して、今日の「人新世：大絶滅」に至らしめた。
- ところが地球自然の破壊が世界的に進行し局地的な公害被害と公害反対運動が勃発し、ローマ・クラブの『成長の限界』によって脱人間中心主義の「人間観」「文明観」を模索し始めた。
- 前正規後半に台頭したポストモダン哲学は資本主義体制に隠された「分裂症的な衝動性」を暴き出す批判哲学を生み出した。1970年代世界各地の公害 多発、石油危機、オイルショックによる世界不況、資本主義の病理性が露呈した。
- ポストモダン哲学巨頭ドゥルーズ/ガタリは、資本主義は欲望する諸機械、分裂症的機械と断じた。経済学にはこういう概念言説はなく、啓蒙思想を立ち上げたデカルトは、「絶対理性による、機械思想」を表明し、ホッブスは「機械原理の社会制度という怪物」を構想していた。
- 資本主義を駆動する無数の生産組織や企業組織は、相互に関連し連動し、利潤極大原理と資本増殖原理の市場機構の上で、止まることなき「弱肉強食」「勝ち組・負け組」「富裕者・貧困者」の排他的競争を、接続機械・連結機械の自動運動のように繰り返す。しかし分裂症なのだ。
- 資本主義の極限的な特性は、①不況・恐慌で調子を狂わせ、②利潤・資本極大を目指し、③資源枯渇大絶滅を欲望し、自律統合を失調した、分裂症の爆薬、自己破壊・自死壊滅マシンだ。
- 工業文明の駆動エンジンだった資本主義は、「欲望とリビドーの極致」に至って、「本来的な分裂症と死の欲望」を顕現させて、自ら「死に体」に至り、統治力・制御力を失っている。資本主義は死に体となっても、新領土の開拓を目指し、最後の産業革命に躍起となって取り組んでいる。
- 最後の産業革命とは、「AI・IOT革命」「脱炭素・再生エネルギー革命」である。前者は電力暴食、後者は希少性のレアメタルやレアアースの枯渇のために途絶するだろう。

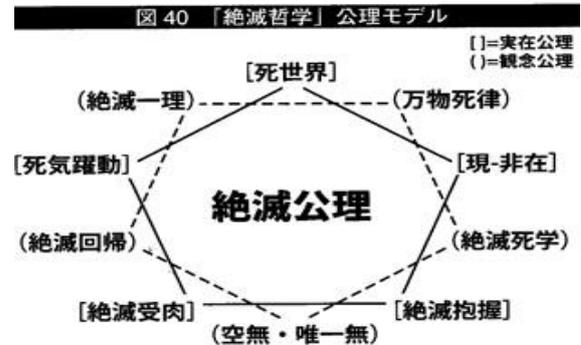


図38 「絶滅便乗型」資本主義の台頭



第 11 章 人新世の絶滅学

- 21 世紀の初頭に人新世学説が提唱され、**最終人類**となる現生人類は、ローマ時代に発する「メント・モリ：死を思え」を、全面的に、現実的に厳しく思考することを運命づけられた。
- 洞察力に優れた先駆者たちは、大絶滅に直面する現生人類の行方を「すべてはすでに死んでいる」、「**人類なしの地球・宇宙**」を予見していた。
- リオタールは、「すでに死んでいる」と予言し、**レイ・ブラシユ**は「哲学は、絶滅の論理手段に過ぎない」と明言した。それらを具現化するために著者は「**絶滅哲学**」公理モデルを提案する。
- 絶滅基準の観点に立って、古今東西の「絶滅研究」の知見から得られた絶滅哲学の公理の全てを、敢えて「**反転させ逆転させて**」全体構想を取りまとめた。



第 12 章 最後のユートピア

- 本書は、科学知見と哲学知見による「**大絶滅の現実実在性**」を、「人新世：大絶滅」の未来を生きる**世界の若者たちに届けなければならない**という使命感で書き上げてきた。
- 「人新世・大絶滅」の進行が制御も停止もできないとしても、**気候危機と絶滅事態**は、地球惑星上の地理的・地勢的・気候的な条件によって異なるので、現生人類の絶滅化が地球上で一様に進行するわけではない。最終叡智を必死に活用して生存持続を図る人類もいるだろう。「どこにもない、共同体」を構築して、力強く生きていこうと、「**最後のユートピア**」問題が浮上してくる。

- 人新世：大絶滅を生き抜くための「**復元性ユートピア**」の構想は随所に述べられ、「**徳が重んじられている国**」、「**農業が重視された国**」、「**市民・農業主体の共同体**」等々。**寺島実郎**は、経済に専念してきた戦後日本が築いた**バベルの塔**はもろく崩れ去ったという。**連帯経済**や**コモンズの共同体**、心のレジリエンス、神学こそが最も野心的な理論的領域として残されているとも言われている。



- 著者は、「**文明崩壊と農耕回帰文明の構想**」を学会発表し、「**宗教—科学—芸術**」の三位一体の精神活動原理が「**自然畏敬：農心—農耕叡智：農智—農耕耕芸：農芸**」という三位一体の精神活動原理へと発展することを論述した。
- H・キング**は、東アジアの**伝統農業**が4千年間に獲得せる惰力で働いている無垢の伝統を有するほぼ**5億人の強靱な人種**の実践を評価している。農耕文明4千年の中に「**農耕回帰の超越性ユートピア**」が存在していたのである。
- ニヒリストといわれた**ショーペンハウアー**は、**インド哲学**や**仏教**にも精通していて、苦難と苦痛を経てこそ、人間の精神が大きく変貌すると指摘していた。絶望の瀬戸際まで追い詰められた挙句に、人間は自分自身の内面に帰還し、自分と世界を認識し、自分の全存在を変革すると。
- 哲学学問発祥から**7000年**を経ても、**人類も叡智も進化するものでは決してなかった**。人類・文明を絶滅させた「**自然の大洪水**」が、「**人為の気候危機による大洪水**」に変わったただけだ。

所感：人新世・大絶滅への対処方法は、最終的には「**農耕回帰の超越性ユートピア**」への回帰ではないかと提言している。他国の資源に依存した工業文明は戦争を必要とする歴史もあり、抜本的な見直しを求められている。斎藤幸平『人新世の資本論』も同様な視点ではないかと思う。

筆者も『屋上菜園エコライフ』や『豊かで楽しい海洋観光の国へ』の中で類似の意見をし続けてきた。工業文明の危うさを再検討するべき時が来ているのではないだろうか。(文責 中瀬)

※ 参考に『豊かで楽しい観光の国へ ようこそ』の はじめに を添付した。